

ガラス

青い雨は湖面に降り注ぎ
樹影を揺らす

片々にされた大気の中に
安逸が寝そべる

信じる者を蹴飛ばしてまで
僕は戻るべきなのか

干からびた抒情に水をかけ
空しくも水をかけ

生命とはこれではなかったか
それとも別にあるのか

生きることの哀しみもなく
そして喜びもなく

青い雨は無力に降り注ぎ
私の顔影を揺らす

湖面は生の歩みをあざ笑い
私のみじめな弱さをあざ笑う

「御前にはそれがお似合いだ
せいぜい水をやるがいい
御前が愛し、そして棄てた
その干からびた情婦にな」

私は気付くと青い雨の中
空しくも水をかけていた

(1986.10.28)